

かさはらの大窯

笠原 妙土窯

滝呂日影1号窯

平成21年7月21日(火)～12月28日(月)



妙土窯出土 鉄釉天目茶碗



妙土窯出土 緑釉天目茶碗

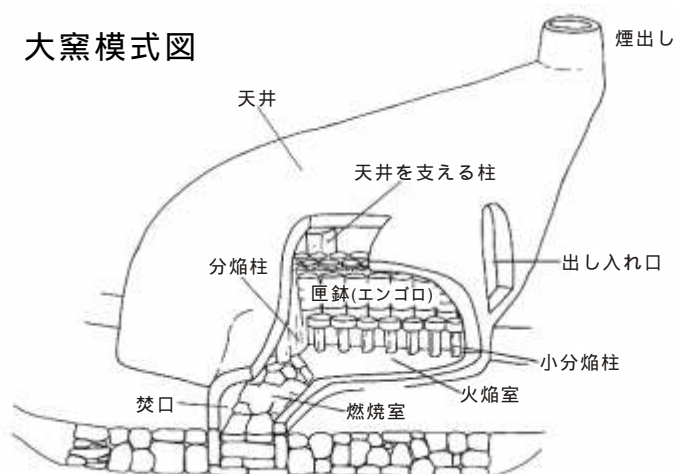
大窯

大窯とは、15世紀末から17世紀の初めにかけて美濃と瀬戸で築かれた窯を指す名称です。この大窯の存在は、美濃と瀬戸の陶器生産において交流があったことの証しでもあります。概ね、肥前(唐津)から連房式登窯が導入される以前の窯のことを、大窯と呼んでいたようです。考古学では須恵器以来の地下式の窖窯と区別し、平面形が二等辺三角形で、半地下式から地上式へと変化する窯のことを指します。

焼成室の大部分が地上に築かれたことによって、地中の水分の影響が減り、温度を高めやすくなりました。窯の側壁に製品を出し入れする出入り口を設けることができたので、窯詰めが容易になりました。また、天井を支える柱を焼成室内に設けて、焼成室の面積や容積を広げることに成功しています。

大窯の革新的な特徴は、燃焼室と焼成室の間の構造にあります。分焰柱で火焰を二手に分け、さらに小分焰柱で細分して左右に広げます。小分焰柱の上には粘土を詰めた匣鉢(こげばち)を載せているので、それぞれの間は後世の「狭間孔(せままな)」のようになっていました。その奥の焼成室は燃焼室よりも一段高く、小分焰柱の間を通過した火焰はその段差に当たって上昇するので、圧力が高められて窯内の熱を制御しやすく、質の高い施釉陶器を焼成することができました。

大窯模式図



妙土窯の発掘

旧・笠原町^{注)}は、昭和48年(1973)に町内に所在する遺跡の実態調査を実施し、翌年の春に『笠原町の文化財』と題する報告書を刊行しました。その成果に関心が寄せられるなか、現・多治見市笠原町2457-6の妙土窯で緑釉の陶片が採集され、「織部釉」として知られる銅緑釉の使用に関心が高まります。そこで、当時の笠原町教育委員会が事務局となって、名古屋大学と笠原町文化財調査委員を中心とする調査団が結成され、その年のうちに発掘調査が行われました。

その成果としては、丘陵の斜面を掘り込み岩盤上に築かれた、窯体の大半が地上に露出する16世紀の大窯が比較的良く残っているのが確認され、その全長は7.83mであることがわかりました。窯の南東には作業小屋があったとみられ、北西にも平坦面が検出されています。

天井部は崩落していたものの、窯体の床面と両側壁の下半分が良く残っており、発掘調査でその構造を把握することができました。床面から天井までの高さは、支柱の形状から約1.4mと推定されています。



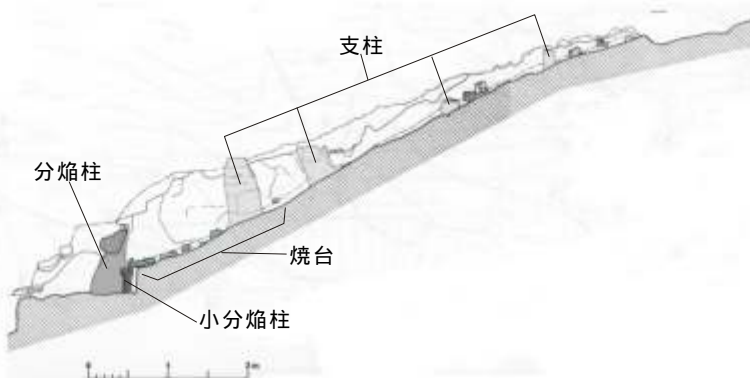
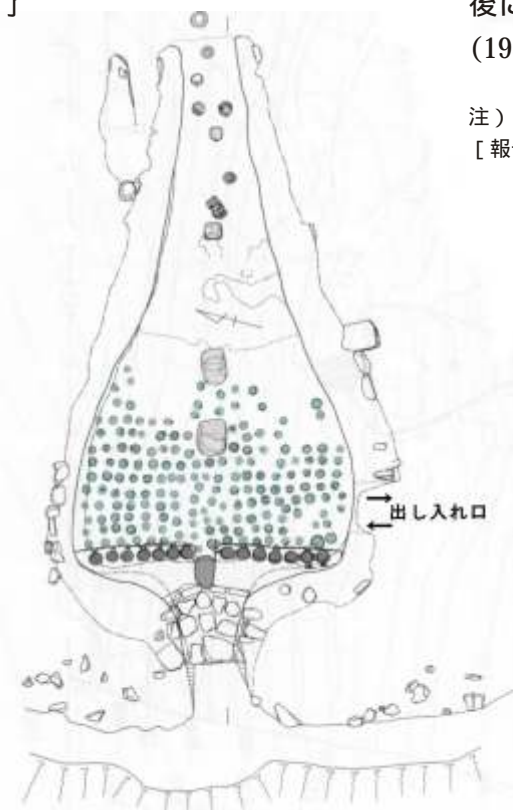
分焰柱の奥には、左右に7本ずつの小分焰柱が立てられていて、その上には内部に粘土を詰めた匣鉢が載せられ、連房式登窯の狭間孔のようになっていました。

焼成室床面の傾斜角は最小で20度、最大で31.5度を測り、平均すると26.5度になります。第2支柱までは14列、推定で223個の約台が並んで匣鉢が積まれ、その奥の第3支柱までの間では、匣鉢を用いない甕かめや播鉢すりばちなどの大型品が焼かれたものと考えられます。

製品には天目茶碗や茶入れといった茶道具、皿や杯などの食器、調理具である播鉢などがあり、これらの製品は美濃・瀬戸の大窯の編年で、第2段階の特徴をもっています。こうしたことから、窯の稼動時期は16世紀とみられます。

破壊をしないよう、窯体の断ち割り調査を行っていないので、この窯の被熱の状況など、不明な点もあります。発掘終了には埋め戻されて、現地で保存されています。昭和55年(1980)には、岐阜県の史跡に指定されました。

了



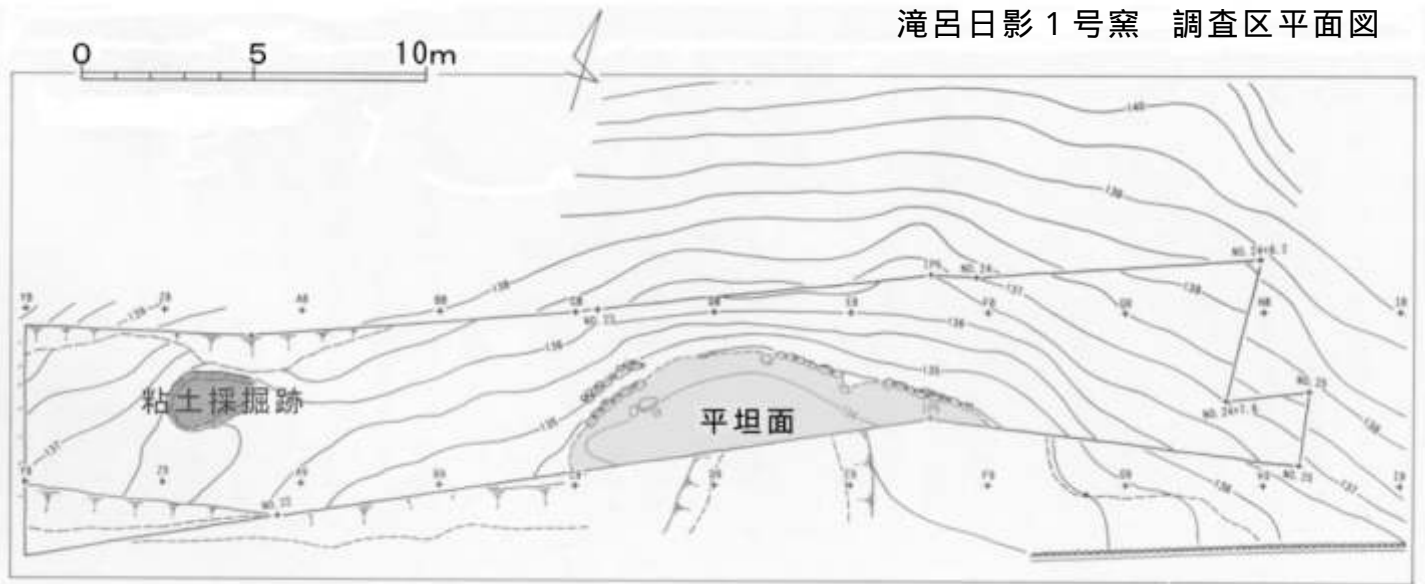
注) 旧・笠原町は、平成18年1月23日に多治見市と合併しました。

[報告書] 笠原町教育委員会1976『岐阜県土岐郡笠原町 妙土窯跡発掘調査報告』

妙土窯 平面図・断面図

滝呂日影 1 号窯の発掘

滝呂日影 1 号窯 調査区平面図



多治見市滝呂町15丁目231 234に所在するこの大窯は、古くから存在は知られていましたが、その実態についてはよくわかっていませんでした。昭和63年(1988)には、地元住民の案内で市教委が踏査し窯の位置を確認した際、展示資料の「祖母懐」銘の茶壺片を含む遺物が採集されました。

間もなく、窯の立地する斜面の裾部分に、急傾斜地の崩壊対策として擁壁を設置する計画が持ち上がり、工事で破壊される部分を記録保存するため、平成3年(1991)に市教委が発掘調査を実施しました。したがって、発掘調査した区域は滝呂日影1号窯の物原(灰原)の先端部に該当したようですが、それ以外にこの窯と直接的な関連をもつ遺構は、検出されていません。

調査区内からは、茶碗や水指、茶入などの茶道具をはじめとして壺や徳利、播鉢など多様な出土品がありましたが、大窯の製品をほぼ同時期の妙土窯と比較すると、いくつかの相違点があります。まず、滝呂日影1号窯では緑釉の発色が悪く、不安定です。また、妙土窯で数多く焼かれた灰釉の印花文丸皿はこの窯では少なく、逆に灰釉の内禿皿がみられました。出土品の観察から、妙土窯よりも若干、窯の稼動した年代が下ると考えられています。ほかに、連房式登窯で焼成された製品も出土しました。これらには磨耗痕があるようですが、江戸時代に生活の中で使用したものが廃棄されたのか、あるいは近隣の連房式登窯の製品の混入なのかは、わかっていません。

妙土窯や滝呂日影1号窯の窯道具には、線刻を施したり、菊花の印を押したものが認められます。これらを窯印とし、その中に入れたやきものを作った陶工が誰なのかを区別するためにつけられたのだと解釈することも可能かもしれませんが、しかし、すべての窯道具に見られるわけではないため、こうしたものの存在は検討すべき課題です。

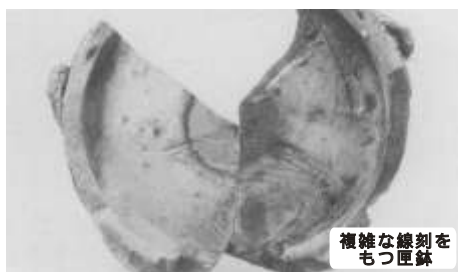
[報告書]多治見市文化財保護センター編1992『滝呂日影1号窯発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第33号



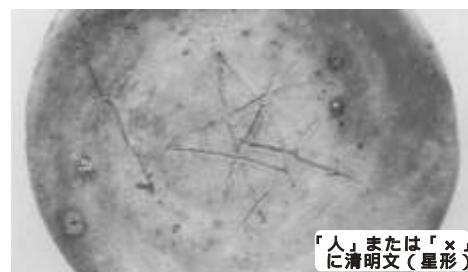
滝呂日影1号窯出土 窯道具(匣鉢)



滝呂日影1号窯出土 窯道具(はさみ皿)



複雑な線刻をもつ匣鉢



「人」または「x」に清明文(星形)

同時開催 ミニ展示

～ 多治見市文化財保護センターの
新収蔵品を中心に展示します～

にし うら やき 西浦焼 と こ けい やき 虎渓焼

西浦焼



展示資料

幕末に美濃焼物取締役として活躍した3代目西浦円治は、明治時代に入ってやきものの生産と販売が自由化されると自らも陶磁器の生産に乗り出します。染付の名工・加藤五輔に依頼するなどして品質の向上に力を注ぎ、西浦の名を内外に広めました。

西浦円治は明治20年代になると自社工場を建てて、質の高い洋食器などを生産します。華麗な上絵付や、「吹き」に代表される優美な釉下彩による装飾は、美濃焼を美術工芸品の域にまで高めました。今回は新たに収蔵した資料を中心に、西浦焼の製品をご紹介します。

虎渓焼

虎渓焼は、西浦焼の工場長を務めた西浦辰太郎が独立して、譲り受けた西浦円治の窯を虎渓山下に移築し、明治38年(1905)に開いた窯で製作されました。製品には、徳利・茶碗・菓子器などがありましたが、操業期間が短く製品が少ないため、当センターの収蔵品は貴重な資料といえるでしょう。西浦焼とは作風が異なりますが、意匠や技法には共通点も認められます。

辰太郎に先立ち、明治30年前後にも「虎渓焼」の名で陶器が焼かれたことがありましたが、ここに展示した資料は前者の虎渓焼とみられます。

[参考文献] 多治見市 編1987「美濃焼の発展」『多治見市史』通史編 上
高木典利 編2000『西浦焼』
財団法人 岐阜県陶磁資料館2008『華麗なる明治の名品 美濃西浦焼展』図録

< 「西浦焼と虎渓焼」に展示中の新収蔵品一覧 >

- ・西浦焼 磁器釉下彩透かし彫秋海棠花瓶(平成21年度 新収蔵品)・・・
- ・西浦焼 磁器瑠璃釉盛上龍文花瓶(平成20年度 新収蔵品)
- ・西浦焼 磁器釉下彩吹絵芥子文花瓶(平成20年度 新収蔵品)
- ・西浦焼 磁器上絵菊水蝶画ティーセット(平成20年度 新収蔵品)
- ・虎渓焼 土瓶(平成20年度 新収蔵品)・・・



展示資料

本展の開催にあたってご協力、
ご指導を賜りました皆様に、心より感謝
申し上げます。

多治見市文化財保護センター企画展

「かさはらの大窯

笠原 妙土窯・滝呂日影1号窯」

展示期間：平成21年7月21日(火)～12月28日
開館時間：午前9時～午後5時 休館日：土・日・祝日
入場無料

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10 6 26
(0572)25 8633 FAX(0572)24 5033
URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>